

古代ギリシャのリテラシーとその教授方法に関する研究

Literacy and Teaching Methods in Ancient Greece

中野和光

要 旨

本研究は、古代ギリシャの話し言葉社会の中における文字使用の在り方、話し言葉社会の教育の伝統との関連における学校におけるリテラシーの教授方法を明らかにした。古典期(BC 5～4世紀)のギリシャの学校では、文字の教授が行われたが、音楽と体育という話し言葉社会の教育が中心的なものであったこと、書くことに対する批判(ソクラテス、プラトン)はあったが、読み書くことを積極的に位置づけた教育実践や理論(イソクラテス、アリストテレス)が生まれたことを論述した。

キーワード：古代ギリシャ、アルファベットの発明、話し言葉による教育、リテラシーの教育

はじめに

本研究は、話し言葉と書き言葉との関係の視点で、古代ギリシャにアルファベットが現れた時に、文字は話し言葉社会のどのような文脈の中で使用され、その中で現れた学校の中で、読み書きはどのように教えられたかを明らかにすることを目的としている。

古代ギリシャの話し言葉と書き言葉に関する最近の研究は、Tony M. Lentz, William V. Harris, Rosalind Thomas, Kevin Robbらの研究が主要なものである⁽¹⁾。師尾晶子は、1980年代から1990年代にかけてのこれらの研究は、話し言葉と書き言葉の文化を二律背反的にとらえてきたそれまでの説を批判し、両者は相互補完的に存在していたことを述べている⁽²⁾。古代ギリシャの教育に関する先行研究は、John P. Mahaffy, Kenneth J. Freeman, H. I. Marrou, Frederick A. G. Beck, James Bowenらの研究が主要なものである⁽³⁾。

本研究は、これらの先行研究を主として参照しながら、古代ギリシャのリテラシーとその教授方法につい

て話し言葉と書き言葉の関係の視点から検討してみたい。

古代ギリシャにおける文字使用の始まり

(1) 文字使用の始まり

古代ギリシャ人は、エーゲ海、イオニア海に挟まれたギリシャ本土以外に小アジア、クレタ島、シリア等の東地中海の広い地域に住んでいた。BC1700ごろ、クレタ島のクノッソスの宮殿には文字(絵文字と線文字A)が刻まれていた。この文字を書いたクレタ人の人種は不明である。BC15世紀に、クレタ人に代わって、東地中海の海洋貿易の中心になったミケーネ人は、古代ギリシャ人の先祖で、線文字Bという文字を宮廷の記録のために使った。BC13世紀に、ミケーネの海上覇権が減んで、その後継者となったシリア地方のフェニキア人は、自分たちの文字を使っていた⁽⁴⁾。アルファベットは、交易や傭兵としてフェニキア人と交流してフェニキア文字を知ったギリシャ人が、子音しかないフェニキア文字を使って文字を加え、ギリ

シャ語の母音を発音できるようにしたのが始まりである⁽⁵⁾。

その時期については、BC 8 世紀前半頃という説が有力とされているが、他にも様々な説がある⁽⁶⁾。

(2) 文字使用の拡大

ここでは、文字使用の拡大を示す具体的な事例を挙げてみよう。

イーノス Rihard Leo Enos によれば、古拙期 (BC 7 世紀末～BC 5 世紀初め) に文字を書いたのは、陶器や石に文字を書いた職人たち、吟遊詩人である。吟遊詩人たちは、書くことを記憶の補助として使った。今日私たちが、知っているホメロスのテキストは、吟遊詩人の集団が、集成し、書き写したものである。上流階級は、書くことを交易の記録として使った⁽⁷⁾。

石や陶器や青銅器にかかれた銘文について、ブライアン・クックは、次のように説明している。

公的な碑文には、次のものがある。

- 民会での決議
- 他の都市との条約
- 戦いの記録
- 神殿への奉納物のリスト
- 歴代の執政官のリスト
- 競技の勝利者のリスト
- 没収財産の競売記録
- 公費の収入・支出合計

私的な銘文

- 所有者の明記
- 神々への奉納
- 壺絵の署名
- 墓碑銘—墓碑には、本人の名、父の名、住民登録をしている区、が書かれている⁽⁸⁾。

ロブ Kevin Robb は、書かれた法律について次のように説明している。

BC650 年ごろ、法律が書かれた。クレタ島のドレロス (Dreros) 市で、書かれた法律が生まれた。話し

言葉によって社会統制は行われていたが、書かれた法律の方がより良いという認識が生まれた⁽⁹⁾。

ハリス William V. Harris は、書くことの拡大を次のように説明している。

書かれた法律が現れた同時期、遠距離の外交や、商業で、書くことが用いられた。

BC 6 世紀には書くことが広がった。アテナイ、コリント、ミレトスといった都市には、何百という読み手がいた。イオニアの哲学者たちは、書くことを用い始めた。BC550 年頃、アテナイには公的な書記 (secretary) がいた。アテナイの花瓶には、名前の刻印があった。

BC510 年ごろには、追放した政治家の名前を書く陶片追放が行われた⁽¹⁰⁾。

ハリスは、これら以外に、リテラシーの拡大を示す出来事として次のことをあげている。

家事の管理、財産目録の作成 (クセノフォンが行っている)

計算書、勘定書き (アリストファネスの『雲』の中に書かれている)

徒弟の契約 (クセノフォンが述べている)

雇用契約

遺言

奴隷の解放

嘆願書

他の同盟国との関係における文書の使用

歴史を書く (ヘロドトス、ツキジデス)

通信 (手紙は日常的には使用されていなかった。重大な問題、機密の通信に用いられた)

BC370 年代までに、アテナイ市内で、本の販売が行われていた。プラトンの『ソクラテスの弁明』の中で、アナクシマンドロスの本を買うことができたことが書かれている。

アテナイの古典期のリテラシーは、重装歩兵階級以上の男性、熟練工 (craftman) の中の一部、ごくわずかの女性に限られていた⁽¹¹⁾。

ボウエン James Bowenは、BC 5 世紀のアテナイにおいて、税の徴収、租税のリストといった重要な私的な記録は、石に刻まれて公的な場所に置かれた、と述べている⁽¹²⁾。

トーマス Rosalind Thomasは、ペリクレス（BC490 年代～440年代）は、書かれた原稿を持って話した、と述べている。BC 5 世紀末、パピルス巻物と書店が現れた。BC 5 世紀末（410年代）、アテナイには、公文書保管庫があった⁽¹³⁾。

話し言葉による教育

アルファベットが発明されたころのギリシャにおいては、伝統的な価値観や規範はホメロスやヘシオドス等の叙事詩によって伝達されていた。叙事詩は、各地を遍歴する吟遊詩人によって演じられた。

レントン Tony M. Lentzは、古代ギリシャの話し言葉の教育について、次のように説明している。

古代ギリシャの教育の起源は、貴族の若者の訓練のための記憶、復唱、話し言葉のパフォーマンスという話し言葉の伝統である。詩人は、文学的芸術家というよりも、道徳的教師だった。趣味を形成するというよりも生徒の性格の形成が求められた。生徒は詩人の言葉を記憶した⁽¹⁴⁾。

この伝統は、BC 5 世紀においても続いた。ロブによれば、BC 5 世紀のアテナイの民主主義の中で、リテラシーは明白に拡大していたが、それは、市民的、法律的、外交的事柄、商業的發展に関連していた。教育は、主要には、話し言葉と詩に基づいていた⁽¹⁵⁾。

ロブは、古代の詩のほとんどは、貴族の酒宴（symposion）において演じられ、社会的制度としての酒宴においては、客をもてなすため、友情の印として水差しを贈り、ワインを飲み、叙事詩を歌い、踊った、と述べている⁽¹⁶⁾。

学校教育の始まりとリテラシーの教育

（1）学校教育の始まり

ハリスは、BC 6 世紀には、学校はすでにあったに

違いないと述べている。BC413年頃、ギリシャのあらゆるポリスは、少なくとも一つの学校を持っていた。田舎には学校はなかった⁽¹⁷⁾。

ボウエンによれば、ヘロドトスの『歴史』の中で、BC496年、学校の屋根が落ち、200人の生徒のうち、一人だけ助かった、BC491年、ボクシングの試合で不正をとがめられて、学校を攻撃し、円柱を倒し、屋根を落とした男がいたが、その学校には60人の生徒がいた、という記述がある。BC413年、トラキア人（Thracians）が、ミカレッス（Mycalessus）を略奪したとき、彼らは住民を殺し、街の最も大きい学校を破壊し、その中のすべての子どもを殺した、という記述がある。このように多数の生徒を教えた学校の記述はあるが、その組織的な教育については、書かれていない。

BC490年代ごろまでに、富裕な家庭は、彼らの息子を学校に行かせていた。

赤ちゃんは生まれると6歳までは、家庭で育てられた。市民性への準備は、7歳から始まった。法律によるものか、社会的慣習によるものか不確かである。慣習的な学習分野は、音楽と体育とリテラシー（読み、書き、計算）の初歩であった。文字の教師、音楽の教師、身体訓練の教師がいた⁽¹⁸⁾。

（2）初等学校の教授方法

フリーマン Kenneth J. Freemanは、古典期のギリシャの学校を次のように説明している。

学校のための特別な建物はなかった。教師は、学校を私的に開いた。音楽の教師、体育の教師、文字の教師がいた。音楽の教師は、豎琴の演奏を教え、抒情詩人の歌を唄わせた。体育の教師は、レスリング、ボクシング、格闘技、徒競走、跳躍、円盤投げ、槍投げを教えた。文字の教師は、読み書き、いくらかの算術を教え、ホメロス、ヘシオドス等の詩を暗誦させた。BC 4 世紀末には、これに素描と絵が加わった。

6歳～14歳の8年間でこれらの三つの部門の学習に充てられた。

最初の6年間は、初等の三部門

残りの2年間は、それらの洗練に充てられた。

BC6世紀の初めに、この制度が始まった。

最初の頃は、18歳までだった。BC5世紀末にかけて、14歳～18歳の最も裕福な家庭の息子のための中等教育が勃興した。18歳～20歳は軍事訓練（国家による義務教育）を受けた⁽¹⁹⁾。

グリフィス Mark Griffithによれば、学校は、特別な建物はなかった。音楽、舞踊、体育は、演舞場または体育場で行われた。

生徒の一日は、次のようなものだった。

「明け方に起き、服を着て、父の家を出る。(中略) 後には、パイダゴゴスがついてくる。パイダゴゴスは、手に、徳の実施を書いた書き板、過去の善い行いを書いた本、音楽学校に行く場合は、竖琴を持っている。」「学校は、日の出とともに始まる。昼食は、自宅ですべて、午後はまた学校へ行く。学校は日没に終わる。日曜日のような休日はない。祝日は多くある。毎月の7日と20日はアポロの日である。」

古代ギリシャの学校の書字の教授方法の説明でよく用いられるのは、ドウリス (Douris) の花瓶の壺絵に描かれた学校の光景とプラトンの『プロタゴラス』における説明である。

ドウリスの壺絵の書字の授業の光景

教師が書字板に尖筆で字を書いている。

生徒が一人その前に立っている。

教師は、書写しているか、生徒の書字を直しているかしている。

生徒の後ろには髭を生やしたもう一人の男がいる。おそらくパイダゴゴスである。

生徒は一人ひとり教師の前に立って、教師が書いたものを受け取るか、自分が書いたものを直してもらおう。机はない。膝の上に書字板をおいている。

ドウリスの壺絵の復誦の授業の光景

教師が、背もたれのある椅子の上に座って手に巻物を持っている。巻物には、叙事詩が書かれて

いる。教師の前には生徒が立っている。生徒の後ろには、パイダゴゴスがいる。教師が詩を読み、生徒が復誦する。学校の壁には、巻物が紐で結ばれて、ぶら下げられている。巻物を入れるかごが置かれている。

プラトンの『プロタゴラス』における書字の教授方法の説明

生徒が文字を読み、理解し始めると、教師は、生徒のそばの長椅子において、生徒にそれらを暗誦させた。選ばれた詩は、道徳的教訓、物語、昔の英雄を讃えたものだった。目的は、生徒たちがそれを称賛し、模倣し、そのような人間になりたいと願うようにすることであった。文法は、あとの段階で教えられた。生徒たちは、ホメロスやアイスキュロスやエウリピデスを復誦するとき、しぐさを使ったり、劇化して演技した。吟遊詩人たちの復誦や、劇場の演技が手本だった。

生徒がある程度できるようになると、書き取りの授業が始まる。

教師が何かを読むと、生徒がそれを書きとる。

最初は、簡単な単語、後には、詩人等の文章を書きとる。

上級の生徒は、洗練された書き方—速度と美しさ—が求められる。筆記体の文字の使用も求められる。

少年が、書くことに慣れていない場合、教師は、書字板に線を引き、その書字板を生徒に渡し、生徒にその線が指示するように書かせた⁽²⁰⁾。

フリーマンによれば、プラトンのこの記述は、次のように解釈される。

1. 教師が書字板に文章を書き、生徒はその下で、同じ文章を書き写した。
2. 教師は書字板に平行線を引き、生徒はその間に書いた。
3. 教師は、さまざまな文字のおぼろげな、あらっばい輪郭を書き、生徒は、尖筆で細部を埋めながらそれを越えて書いた。

プラトンによれば、これらの教授の中で、子どもたちはすぐれた詩人の作品を暗記し、演奏し、優れた肉体を持つことによって、数多くの訓戒に接し、言行ともに優れたものになる⁽²¹⁾。

プラトンの晩年に書かれた『法律』の中では、読み書きは、10歳から約3年間、堅琴は、13歳から始めて3年間続けるのが適当であると書いている。体育については、軍事訓練（戦争に関係のあるすべての身体的訓練）、歌舞を挙げている。さらに、計算と数、線、面、立体の測定、天文学（軌道を運行する諸星相互の関係）、を学ぶべき学問として挙げている⁽²²⁾。

イソクラテスの弁論学校の教授方法

ペリクレス時代（BC443-429）、ソフィストたちが、14～18歳の少年に、上級の学習（弁論術、数学等）を授業料をとって教え始めた⁽²³⁾。生徒は、貴族の家庭の子どもだった。ロメイエ＝デルベによれば、ソフィストの出現の背景には、ギリシャの民主政治によって、権力を握るためには、言葉の使い方と議論の仕方を身に付けることが必要となったことがある。「人間尺度論」で有名なプロタゴラス（BC485-411）、プラトンの『ゴルギアス』の中で弁論術を主張したゴルギアス（BC483-35）、ヒッピアス、プロディコス等が良く知られている⁽²⁴⁾。ポウエンによれば、ソフィストたちは、旅をする外国人がほとんどであった。法廷の弁論のためのハンドブックが作成され、売られた⁽²⁵⁾。

イソクラテス（BC436-338）は、裕福な家庭に生まれ、初等学校、軍役を終えて、プロディコス、ゴルギアスの弟子となり、ソクラテスとも勉強したときもあったが、弟子にはならなかった。BC390年、弁論学校を開いた⁽²⁶⁾。

廣川洋一によれば、イソクラテスの学校は自分の家だった。修学期間は3～4年であった。学生は初期は、アテナイ市民、後半は、外国からが多かった。人間一般のためになる共通の公的な事柄を弁論の論題とした。教育の目的は、弁論において巧者になるよりも徳性の涵養を目的とした。学生たちには、詩文、散文の文学、歴史、地理、政治、倫理、道徳、といった書物

からも材料を集めさせた⁽²⁷⁾。レンツによれば、イソクラテスは、自分の弁論を話し言葉で用意して書き、学生たちに音読させた。書くときは、架空の聴き手を想定して書いた。学生たちには、「もし、あなたが学問（learning）を愛する人ならば、あなたは多くのことを学習する人にならなければならない」といって、広い範囲の知識を探求させた⁽²⁸⁾。

プラトンのアカデメイアの教授方法

ハリスによれば、ソクラテスは、書くことに次の理由で反対している。

- ・読むことは記憶に有害である。
- ・書くことは、記憶力を弱くする。
- ・書くことは、真理ではなく、知恵の外見のみである。
- ・読むことに頼る人は、賢くない、意見者である。
- ・絵を描くのと同じか、書かれたテキストは、問いに答えない⁽²⁹⁾。（根拠は『ゴルギアス』、『フェイドロス』）

プラトン（BC428-348）は、貴族の家に生まれ、アテナイの初等学校の教育を受け、軍事訓練も受けて、ソクラテスの弟子となった。ソクラテスの処刑後、公的生活から引退し、エジプトのギリシャ植民地、シチリアを旅行した。BC398年にアテナイに帰り、アカデメイアを開いた。彼は、体系的な教育理論の形成を始めた。『共和国』『法律』の中では、弁証法は、教育活動の最高度の形態とみなされ、教授方法は、話し言葉による問いと答え、エレンコス法一問う人が相手を袋小路か矛盾に追い込むように試みる一が、BC389-370の間、続いた。ノートは、知識の見せかけを与える記憶活動の一形態であるとされた。学習内容は、数学、平面幾何、立体幾何、数の理論、求積であった。後半は、プラトンはこのスタイルは使わなかった。BC367年、プラトンは、シラクサを訪問した。アカデメイアの学習内容をピタゴラスの学問（算術、平面幾何、立体幾何、天文学、音楽）に変えた。

プラトンの『共和国』における教育理論は、次のようなものだった。

公正な社会は、理想国家における教育された人間の支配によってのみ確保される。

人間の目的は、国家の構造と手続きを通じた共同行為によってのみ達成される。最善の制度は君主制か貴族制である。伝統的なギリシャの学校教育は、詩と音楽である。初期の訓練は、身体の発達と伝統的卓越性の開発である。子ども時代には、算術、幾何、等が導入されるべきである。17～19歳の軍事訓練を経て、20歳から15年間、子ども時代からの学習の統合的なものにする。選ばれたものが、数学の学校に入り、10年間、ピタゴラスの5つの学問—算術、平面幾何、立体幾何、天文学、音楽—の学習をする。この学習が終わった後、5年間、弁証法の学習をする。35歳の時に、準備期間が終了し、真理の試論的認識が獲得される。善の形態が知的光の源泉であり、パイデアは、この善に向けての学習である⁽³⁰⁾。

アリストテレスのリュケイオンの教授方法

アリストテレス（BC384-322）は、マケドニアの国王の医者の子として生まれた。BC366年、18歳の時、アカデメイアに行き、17年、あるいは、20年間、在学していた。プラトンの哲学と数学を同等とする考えに反対した。生物学に関心があった。BC347年、プラトンがなくなって、甥のスペウシポスが跡を継いだ。一説では、アリストテレスは、レスボス島に行き、生物学の研究をし、解剖し、発見したことをノートにとったといわれている。BC335-334年に、マケドニア支配下のアテナイに帰り、リュケイオンを作った。リュケイオンでは、生物学、物理学、倫理学、政治学、弁論術、論理する学を教えた。アリストテレスの著作の特徴は、先行学者の引用、その検討、その不十分さの批判、新しい理論の提案である。教授は、現象学的世界の経験から学習された知識に依存する。教育の方法—人間の仕事は、彼の善を見出すことである。そして、その実現に向かって働くことである。その過程において自分自身を充足させ、人生に意味と目的を与えるこ

とである。人生自身が一つの探究である。『倫理学』『政治学』がこの教育の方法について検討を行っている。

アリストテレスの学校教育計画は、第一段階は7歳から始め、知的発達と習慣形成を目的として、読む、書く、体育、音楽、+描画を教え、第二段階は、道徳的訓練を行い、第三段階は、リュケイオンで、論理学、物理学、形而上学、倫理学、政治学、弁論術、詩学を学習する、ことであった⁽³¹⁾。

アリストテレスは、『政治学』の中で、書くことの4つの目的を挙げている。

○金儲け、○家事の訓練、○物事の学習、○市民の仕事⁽³²⁾

アリストテレスは、このように、書くことの学習上の意義を認めている。

おわりに

以上、振り返ってみると、アルファベットが発明されて以降、文字は、少しずつ使用を拡大していった。教育は、叙事詩や抒情詩、劇といった話し言葉によって行われていた。

BC5世紀には、富裕な家庭は、その息子を学校に通わせるようになった。学習内容は、音楽、体育、読み書きといくらかの算術であった。読み書きは、ホメロス、ヘシオドス等の詩を暗誦させていた。ホメロス、ヘシオドス等の叙事詩や劇といったそれまでの話し言葉の教育（ミュージズの統括する教育 Mousike—叙事詩、抒情詩、悲劇、喜劇、賛歌、賛辞⁽³³⁾）の中に、文字の教育は、含まれていることになる。ただ、古拙期と違って、吟遊詩人ではなく、学校において、音楽の教師kitharistes、体育の教師paidotribes、文字の教師 grammatistesによって、子どもたちは教えられている。

民主政治の栄えた古典期のギリシャにおいて、特徴的なのは、教育や学問研究の理論が提案されたことである。イソクラテスの弁論学校においては、公的な事柄を論題として、広い範囲から知識を集めさせて弁論することを教えている。現代の人文科学、社会科学の探究に通じる指導法である。アリストテレスは、経験

から学習された知識に基づき、先行学者の引用、検討、新しい理論の提案を行い、学習にとって書くことが有用であることを明記している。プラトンは、弁証法を最高度の教育活動とみなした。この点について、マーフィJames J. Murphy は、ソクラテスの弁証法は、反対の陳述を対にすることから成っているが、アイスキュロスの悲劇「エウメニデス」(BC458)の中で、論争や議論的な対話が行われていることを指摘している⁽³⁴⁾。反対の陳述を対比することは、プロタゴラスが「対立論法」の中で述べている。このことは、厳密な知識を追求する方法としての弁証法も、その先行形態が、話し言葉の劇の中や、ソフィストの弁論術の中にあったことを示している。

このように、古代ギリシャのリテラシーの教授は、話し言葉の教育の伝統の中で生まれ、初等のリテラシーの教授をもとに、公的な論題のために、広い範囲からの知識を集め、書かれた弁論のモデルをもとに、自分自身の弁論を考えさせるイソクラテスの弁論術の教授が生まれた。一方、ソクラテス、プラトンは、対立する議論を対話によって検討する方法(弁証法)を提案した。プラトンの弟子アリストテレスは、書くことの学習に対する意義を認めた。このように検討してみると、話し言葉の教育の伝統の中で、リテラシーの教授方法が生まれ、そのリテラシーが話し言葉の弁論の術を支え、書くことに基づいた学問的探究を話し言葉の対話が支えている。古代ギリシャのリテラシーの教授方法を検討してみると、話し言葉と書き言葉の教育は、相互に影響し合い、支え合っていることを示している。

引用文献

- (1) Tony M. Lentz, *Orality and Literacy in Hellenic Greece*, The Board of Trustees of Southern Illinois University Press, 1989.
- William V. Harris, *Ancient Literacy*, Harvard University Press, 1989.
- Rosalind Thomas, *Literacy and Orality in Ancient Greece*, Cambridge University Press, 1992.
- Kevin Robb, *Literacy and Paideia in Ancient Greece*, Oxford University Press, 1994.
- (2) 師尾晶子「古代ギリシャの碑文研究の新潮流—碑文習慣をめぐる—」西洋史学、242号、2011、57-69頁
- (3) John P. Mahaffy, *Old Greek Education*, Harper and Brothers, 1882.
- Kenneth J. Freeman, *Schools of Hellas*, Teachers College Press, 1969(c1922).
- H. J. Marrou, *A History of Education in Antiquity*, The University of Wisconsin Press, 1956.
- Frederick A. G. Beck, *Greek Education-450-350 BC-*, Methuen, 1964.
- James Bowen, *A History of Western Education*, Vol.1, *The Ancient World*, Methuen, 1972.
- (4) 村田数之亮・衣笠茂『ギリシャ』世界の歴史4、河出書房新社、1989年、27-97頁
- (5) ジョン・ヒーラー著、竹内茂夫訳『初期アルファベット』学芸書林 1996年、28-46頁
- (6) Roger D. Woodard, *Phoinkeia Grammata: an alphabet for the Greek Language*, Egbert Bakker ed., *A Companion to the Ancient Greek language*, Wiley-Blackwell, 2010, pp.25-46.
- (7) Richard Leo Enos, *Ancient Greek Writing Instruction*, in James. J. Murphy ed., *A Short History of Writing Instruction*, Hermagoras Press, 2001, pp.9-34.
- (8) ブライアン・クック著、細井敦子訳『ギリシャ語の銘文』学芸出版、1996年、42-114頁
- (9) Robb, op. cited, p.85.
- (10) Harris, op. cited, pp.45-66.
- (11) Ibid, p.96.
- (12) Bowen, op. cited, 74.
- (13) Thomas, op. cited, p.13.
- (14) Lentz, op. cited, p.51.
- (15) Robb, op. cited, pp.189-192.

- (16) Ibid, pp.44-52.
- (17) Harris, op. cited, p.57.
- (18) Bowen, op. cited, pp.75-78.
- (19) Freeman, op. cited, pp.79-117.
- (20) Mark Griffith, The Earliest Greek Systems of Education, in W. Martin Bloomer ed., A Companion to Ancient Education, John Wiley, 2015, pp.26-60.
- (21) Freeman, op. cited, pp.146-147.
- (22) Ibid, pp.434-464.
- (23) Ibid, pp.157-159.
- (24) ジルベール・ロメイエ＝テルベ著、神崎茂・小野木芳伸訳『ソフィスト列伝』白水社、2003年、9頁
- (25) Bowen, op. cited, pp.86-87.
- (26) Ibid, pp.92-93.
- (27) 廣川洋一『イソクラテスの修辞学校—西歐的教養の源泉—』岩波書店、1984年、43-69頁
- (28) Lentz, op. cited, p.123.
- (29) Harris, op. cited, p.91.
- (30) Bowen, op. cited, pp.97-110.
- (31) Ibid, pp.114-127.
- (32) Harris, op. cited, pp.81-82.
- (33) Robb, op. cited, p.223.
- (34) James J. Murphy, The Origins and Early Development of Rhetoric, in James J. Murphy ed., A Synoptic History of Classical Rhetoric, Hermagoras Press, 1983, pp.3-18.